

令和2年度穎明館高等学校卒業式式辞

穎明館第34期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、心より、お祝い申し上げます。

本日は、学園本部から理事長の堀越正道先生、副理事長の堀越由美子先生を迎え、またご列席の保護者・教職員・代表生徒の皆様とともに、卒業式を挙行できることを誠にうれしく思います。

コロナ禍にあつて、卒業式の開催についても随分、気をもんでまいりました。それでもこのように、With コロナ時代のニューノーマルにふさわしい卒業式の形を創りあげたことを、まずはご出席の皆様とともに称え合いたいと思います。

さて、卒業生の皆さん、皆さんは穎明館での学校生活6年間、本当によく頑張りました。EMKの精神に基づき、授業・学校行事・部活動等、一所懸命に取り組んで、大きく成長してきました。人生の節目である今日、保護者・先生方はじめ、お世話になった方々への感謝の気持ちをしっかりと表してください。

私からは皆さんに卒業のはなむけとして一つの言葉を贈ります。ラテン語の「メメント・モリ」（死を想え、生きるために死を想え）——この言葉はコロナ禍にあったこの1年、私が常に胸に抱いていた言葉です。

「メメント・モリ」は、もともとは古代ローマで戦いに勝利した将軍が凱旋パレードを行う際、「今日はよくても明日はわからない」ということから、使用人に言わせていたと伝えられています。その後、キリスト教の世界で、かなり徳化された意味合いで使われるようになりました。

この1年、コロナ感染者数、そして死亡者数が、毎日、報道され続けました。不安な気持ちが増すとともに、「単なる数字として扱われる人間は一人も存在しない」とも思っておりました。川崎洋の「存在」という詩に、『二人死亡』と言うな／太郎と花子が死んだと言え」とあります。コロナにより失われた全世界の死に思いを巡らすとき、同時に一人一人、それぞれ名前のある固有の人生、生の価値、重みを受け止めなければならないと思います。

「メメント・モリ」については、アップル共同創業者のスティーブ・ジョブズが、2005年にスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチが有名です。癌を宣告され、死と向き合ったジョブズのメッセージが、多くの人々の感動を呼びました。ここで一部、抜粋して紹介します。

私は17歳の時にこんな言葉に出会いました。「毎日を人生最後の日だと思って生きよう。いつか本当にそうなる日が来る」。その日を境に33年間、私は毎朝、鏡に映る自分に問いかけるようにしています。「もし今日が最後の日だとしても、今からやろうとしていることをするだろうか」と。その答えが「NO」のままなら、ちょっと生き方を見直せということです。

「自分はまもなく死ぬんだ」という認識が、重大な決断を下すときに一番役立つのです。なぜなら、周囲からの期待、プライド、失敗や恥をかくことへの恐怖など、これらはほとんどすべて、死の前では何の意味もなくなさなくなるからです。そこに残るのは本当に必要なものだけです。死を覚悟して生きれば、「何かを失う」という心配をせずに済みます。我々はみんな最初から裸です。素直に自分の心に従えば良いのです。

卒業生の皆さん、皆さんはもし今日が人生最後の日だとしたらなどと、自分自身に問いかけたことはありますか。それを17歳から日課としていたジョブズ。ジョブズはこの卒業式の1年前、49歳の時に癌と診断され、医者から「自宅に戻り身辺整理をするように」と言われたそうです。その後、手術を受け、精力的な仕事とともに療養生活を送るも、2011年に56歳で逝去されました。

ジョブズが数々の厳しい現実を乗り越え、世界を代表する企業アップルをどうして創り上げることができたのか。尋常ではない凝縮した毎日、1日1日の中途半端ではない姿勢で送ったからこそその成果ではないかと思います。それだけにジョブズの言葉はとても重い。もう少しだけ紹介させてください。

あなた方の時間は限られています。だから本意でない人生を生きて時間

を無駄にしないでください。他人の雑音で、あなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なものは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。あなた方の心や直感は、自分が本当は何をしたいかもう知っているはずです。

卒業生の皆さん、皆さんのこれからの人生は、決して順風満帆な時ばかりではないでしょう。むしろ苦難の連続になるかもしれない。皆さんが人生の岐路に立って大きな決断を迫られたとき、あるいは人生で深く絶望することに直面したとき、ぜひ思い出してほしい。「メメント・モリ」（死を想え、生きるために死を想え）——死そのものに意味を見出すことを絶対にせず、そこから「どう生を輝かせるのか」、「どう希望をもって生きるのか」を真剣に考え、自分の内なる声に従って、自分ならではの人生を生きぬいてください。大学受験期をコロナで苦しんだ皆さんだからこそ、私は強く伝えておきたいと思います。

さて、式辞の結びは、創立者堀越克明先生が遺してくれた穎明館モットーです。コロナ禍にあったこの1年、私は、創立者の言葉にも常に励まされ続けました。とくにこのモットーには、人類の限りない叡智への信頼が込められていると思います。これから大学という新たなステージで知性を磨いていく、卒業生の皆さんに、穎明館における最後の激励のメッセージとして贈ります。

仁智は無窮　　穎才を研きよき地球人たれ

穎明館第34期生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんの人生に幸多かれ。

以上、令和2年度穎明館高等学校卒業式式辞といたします。